

仏になるみちは善知識にはすぎず。わがちゑなににかせん。たゞあつきつめたきばか
りの智慧だにも候ならば、善知識たひせちなり。而るに善知識に値ふ事が第一のかた
き事なり。されば仏は善知識に値ふ事をば一眼のかめの浮木に入り、梵天よりいとを下
げて大地のはりのめに入るにたとへ給へり。而るに末代悪世には悪知識は大地微塵より
もをほく、善知識は爪上の土よりもすくなし。

八七三頁

只今は本年度最後に当たる十二月度の御報恩御講を皆様方と共に読經唱題を致しまし
て懇ろに奉修申し上げた次第であります。

只今拝読致しました御書は、建治元（一二七五年）年六月二十二日、日蓮大聖人様が御
年五十四歳の時、身延において認められ、駿河国富士郡西山（静岡県富士宮市）の地頭で
あつた西山入道に与えられた御書です。別名『西山殿御返事』とも称されています。

大聖人様は、本抄述作の十二日前に六月十日に、日興上人の母方の祖父である西山入
道に宛てて『撰時抄』を認められ、国土の災難は時に適わぬ諸宗の謗法によることを説
示いたされ、特に真言宗の邪義を破折されてゐるのであります。

本抄では、その題号が示す通り、中国の善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏の三人に
よる真言の祈雨によつてその後に慘事が起こつた現証に事寄せられて、改めて真言が亡
国の悪法であることを論じられてゐるのであります。

ところで本抄の御真蹟は、第二紙より第十五紙までが總本山大石寺に藏（總本山に格護
される御真蹟は、全四十七紙のうち、第十六紙から最後の四十七紙の全部で三十三紙が
現存しています。第一紙から十五紙までは散失（まとまつていたものが、ばらばらにな
つてなくなること）したかして残つていないうです。

本抄は始めに、植えた木でも強い添木があれば大風が吹いても倒れることはなく、も
ともと生えていた木でも根が弱ければ倒れてしまうと仰せられ、また意氣地のない者で
も助ける人が強ければ倒れることはなく、少しくらい壯健な者でも独りであれば惡路で
倒れてしまふという例を挙げ、仏が世に出なければ三惡道に墮ちるところを、仏を信ず
る強縁によつて一切衆生の多くは成仏することができたことを述べられています。次い
で、阿闍世王・鳩掘摩羅の例を挙げられて、成仏のためには自分の智慧は何の役にも立
たず、善知識に値うことが大事である旨を仰せられているのであります。

次に、仏法の正邪を決する基準として、道理（理証）と証文（文証）とが重要であり、さ
らに道理・証文よりも現証が重要であるとして三証を示されているのであります。

続いて、文永五（一二六八）年頃、東に俘囚の乱（古代末期、いつたん政府統治下に入つた蝦夷
の起こした反乱。俘囚とは政府側に降伏した蝦夷のこと）が起こり、西には蒙古の侵攻を目的
とした使者が来たことを挙げられ、これらは正しい仏法を信じない故に起こると仰せら
れています。そして、真言宗で調伏が行なわれれば、インド・中国・日本の三力國のう
ち、インドはしばらく置き、中国・日本の二國は真言宗のために亡ぼされることになる
と述べられています。そして、真言による祈祷の例として、中国の唐代に、善無畏・金

剛智・不空の三蔵が行つた祈雨は、いざれも大雨が降つたものの大風が吹いて、かえつて大慘事を招いたことを述べられます。

次に、日本の例として、守敏の祈雨、弘法の祈雨について挙げられ、弘法の祈禱では雨が降らず、天皇の祈りによつて降つた雨を東寺（弘法）の門人が我が師の祈りによる雨としたことは、天下第一の誑惑であること。弘法には他にも弘仁九（八一八年）年の疫病払い、三鉢の松（先ごろ患者様から三本葉の松をいただきました。高野山の三鉢の松の種から育てられた希少な苗木からの松の葉だそうです。弘法大師こと空海が遣唐使の船に乗つて唐（今の中華人民共和国）に渡り、仏教の修行をして、日本に帰国する前に、真言密教の教えを広めるには何処がいいのか三鉢杵という密教法具を空に向かつて投げたそうです。すると三鉢杵は天高く舞い上がり、日本に向かつて飛んでいきました。帰国した空海が真言密教を広めるのに相応しい地を探して日本中を周つて、高野山で松の木に引っかかつて三鉢杵を見つけます。それが高野山が真言宗總本山になつた由来でもあるそうです）についての不可思議の誑惑があることを述べられているのです。

次に、中国の天台大師が陳の時代の大干魃（かんばつ）、法華經を読誦してたちまち雨を降らせたこと。また日本の伝教大師も法華經・金光明經・仁王經の三經をもつて祈雨を行い三日目に雨を降らせ、日本第一の難事であつた大乘戒壇の建立を天皇より許されたことを挙げられ、これをもつて弘法の祈雨を推し量るべくであると仰せられています。

続いて、このように法華經は勝れ、真言は劣ることは明白であり、真言によつて祈る日本は亡ぶであると仰せられます。さらに、後鳥羽上皇が承久の乱で敗れて隱岐島へ流されたことから、真言をもつて蒙古と俘囚（ふしゅう）とを調伏するならば日本国は負けると推する故に、身命を捨てて諫言（いんげん）したこと。そしてそれは中国や日本の智者が五百余年の間、一人も知り得なかつた考え方であることを仰せられます。

次いで、善無畏・金剛智・不空等の祈雨について、雨に大風を伴つたことを、どのように心得ればよいかとの問い合わせを設けられ、大日經による祈雨には大きな僻事（ひがこと）が混じつていること。そして、弘法が天皇の祈雨による雨を自らの雨と偽つたことは、善無畏等にも勝る失（とが）であると仰せられます。

さらに第一の大妄語は、弘法の自筆に「弘仁九年の春、疫病（えきびよう）を払う祈禱（きとう）を行つたところ夜中に太陽が出た」というもので、これは日蓮門家が彼らを破折する際の秘事（ひじ）であるから、本文を引いて相手を詰めて言うべきであり、また、これまで述べてきたことは天下第一の大事であるから、人づてに語つてはならないと諱められているのです。

次いで、今の日本も同じであるとし、弘法・慈覚・智証の三人が真言と天台との勝劣に惑つたことから、日本国の人々は今生には他国に攻められ、死後には惡道に墮ちると仰せられ、中国が亡び、人々が惡道に墮ちたことも善無畏・金剛智・不空の誤りによつて始まつたと述べられます。

また日本の天台宗も、慈覚・智証の誤りによつて、本来の天台宗ではなくつたこと。さらに涅槃經・法華經の文を挙げて、末法において正法を説く者が稀（まれ）であることを明示

されています。

次に、**大集經・金光明經・仁王經・守護經**等には「末法に正法を行ずる人が現れる」と、邪法の者が王臣などに訴え、王臣たちは訴えた者の言葉を信じ、一人の正法の行者を罵り、責め、流罪し、殺したりする、そうした時に、梵王・帝釈・無量の諸人・天神・地神等が、隣国の賢王の身に入り代わってその国を攻め亡ぼすであろう」と説かれていることを挙げ、今の世はこれらの經文に説かれている通りであると述べられています。最後に、各々が過去世の善根をよく知り、このたび生死の迷いを離れるよう仰せられ、さらに愚鈍の須梨槃特の成仏と、智慧ある提婆達多の墮地獄の姿が末代の今の世を表していると述べられて、本抄を結ばれているのであります。

本抄において大聖人様は、「たゞあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば、善知識たひせちなり。而るに善知識に値ふ事が第一のかたき事なり」と仰せられ、善知識に値うことの大事を仰せられています。

拝読の御文にも「仏になるみちは善知識にはすぎず」とあるように、大聖人は末法の衆生の成仏には善知識が不可欠であることを教えられています。善知識について天台大師は、外護の善知識・教授の善知識・同行の善知識・實際実相の善知識の四つを示しています。まず「外護の善知識」とは、仏道修行を外から支え、守護する人のことを、「教授の善知識」とは、正しい仏法を教え導いてくれる人のことです。そして「同行の善知識」とは、共に修行に励んでくれる人のことで、最後の「實際実相の善知識」とは、成仏の功德を与えてくれる法のことです。大聖人は、特に「實際実相の善知識」について「所謂南無妙法蓮華經是なり」（御講聞書・一八三七頁）と仰せられ、文底下種の南無妙法蓮華經であることを教示されています。これらの善知識に親近し、仏道修行に精進していくところに成仏があるのであります。しかしながら、「善知識に値ふ事が第一のかたき事なり」と、善知識に値うこと自体が非常に難しいと仰せられています。そのなかで今私達は、最勝最高の善知識である妙法に巡り値うことができた、そのことに感謝し、一生成仏の大道を歩んでもいくことが、最も肝要となるのです。

『摩訶止觀』には、「知識に三種有り。一に外護、二に同行、三に教授なり」（摩訶止觀弘決本 中一〇四頁）と善知識に外護、同行、教授の三つあることが説かれていました。

「外護の善知識」とは、文字通り總本山を外護し、寺院を外護し、妙法弘通を外護していく人を言います。「同行の善知識」は、互いに切磋琢磨し、志を齊しくして、互いに敬い重んじていく者のことです。各講中において異体同心し、よき友となつて切磋琢磨し、広宣流布のために精進していくことが大事です。講中の必要性はここにあります。そして又、「教授の善知識」とは、正法を説き、眞の仏道と仏道でないものを示し、人の迷いを打ち払う善師を言います。末法においては御本仏日蓮大聖人様こそ善知識であり、第二祖日興上人をはじめとする代々の御法主上人、さらには御法主上人猊下に隨順し、所属信徒を教化育成する末寺の御住職も、この教授の善知識に含まれます。大聖人様は本抄の冒頭において、添木した植木は暴風雨に遭つても倒れず、どのよう

な悪路でも助ける人があれば倒れることがないとの譬をもつて、人生の中でどのような暴風雨に遭おうとも、どのような悪路を進むことになろうとも、信心を励まし、導いてくれる善知識に値えれば、苦難を乗り越え成仏の境界に至ることができると仰せになつてあります。

そして又、大聖人様は本抄において、「日蓮仏法をこころみるに、道理と証文とにはすぎず。又道理証文よりも現証にはすぎず」と仰せられ、道理（理証）・証文（文証）・現証の三つの証拠を仏法の正邪・浅深を決する基準として示されています。

正しい仏法を信ずれば正しい結果が現われ、誤った教えを信ずれば不幸な結果が現わることは間違いありません。かつて本宗に在籍していた者たちが、邪教徒となつて現証を強調してくることがあります、それは表面的な魔の通力に誑かされたものであることをはつきりと教え、破折していくことが大事です。

御法主曰如上人猊下は、「一人ひとりが大御本尊様への絶対的確信を持ち、一切衆生救済の大願に立つて、共に励まし合い、助け合い、折伏を実践していくなかに、眞の異体同心の団結が生まれてくるのであります。つまり、理屈ではなく、互いが広布への戦いを実践するところに、眞の団結が生まれてくることを忘れてはなりません」（大白法九〇九号）と御指南されています。

私たち日蓮正宗僧俗は、善知識の大事を肝に銘じ、眞の異体同心の団結をもつて折伏弘通に精進してまいりましょう。

そして拝読の御文に「末代悪世には悪知識は大地微塵よりもをほく、善知識は爪上の土よりもすくなし」とあるように、世の中には悪知識の元をなす邪義邪宗が蔓延り、人々はこれに誑かされて不幸の一途を辿っています。打ち続く自然災害や戦争等による混乱、個々人の悩みや苦しみも、その根本原因は謗法にあります。だからこそ御法主曰如上人猊下は、破邪顯正の折伏の大事を、何度も何度も指南されているのです。大聖人が御講聞書（御書一八三七）に「善知識と申すは日蓮等の類の事なり」と仰せのように、謗法の人を正法に導き救つていく善知識とは、私達日蓮正宗僧俗を指いて他にいません。今こそ、強い決意と行動力をもつて、果敢に折伏に挑戦してまいりましょう。

御法主曰如上人御指南は「広布への戦いのなかで最も大切なことは（中略）講中一結・異体同心の盤石なる体勢を構築して折伏に打つて出ることであります。その盤石なる異体同心の体勢を構築していくためには、一にかかつて私ども一人ひとりの大御本尊様に対する絶対の信と妙法広布にかける断固たる決意、そしていかなる障魔も恐れない破邪顯正の強盛なる信心こそ最も肝要であります。」（大日蓮・令和六年十月号）と仰せであります。

「折伏前進の年」も残り僅かとなりました。現在いかなる折伏状況にあっても、不自惜身命の信行にたてば、御本尊の力用と諸天の加護により道は必ず開かれていきます。

本年初頭、皆で御本尊にお誓いした折伏目標を、最後まで決して諦めずに力を振り絞つて行動を起こし、何としても達成して明年「活動充実の年」を清々しく迎えようではありますか。以上。